

ヨナ書 2章 2-10 節

ローマの信徒への手紙 9章 1-5 節

マタイによる福音書 14章 22-33 節

本日の旧約日課は、ヨナ書です。非常に短い預言書です。短い物語ともいえません。ヨナ書が選ばれているのは、福音書の「舟に乗る」という記述との関連かもしれません。しかし、ヨナ書は短いながらも非常に大切な事柄を語っていますので、本日はヨナ書を中心に学びたいと思います。

物語の主人公は、預言者のヨナです。ヨナ書は、「**主の言葉がアミタイの子ヨナに臨んだ**」（ヨナ 1:1）と始まりますが、この「アミタイの子ヨナ」は、列王記 14章 25 節に登場します。ただし、時代背景が異なりますので、同じ人物かどうかは不明です。列王記のヨナが活動したのは、北イスラエル王ヤロブアム二世の時代です。ヨナ書の方は、「大いなる都ニネベ」という記述があるだけで、時代背景についての説明がありません。ヤロブアム二世は主の目に悪とされることを行っており（列王下 14:25）、ニネベについても「**立って、あの大いなる都ニネベに行き、人々に向かって呼びかけよ。彼らの悪が私の前に上って来たからだ**」（ヨナ 1:2）とあります。同じヨナかどうか不明ですが、預言を語る対象が、主の目に悪を行ったものという設定は同じです。

ヨナ書のあらすじを申しますと、ヨナという人が、主なる神様から「大きな都ニネベの悪」に対する預言を命じられます。預言者としての召命を受けるのです。ヨナという名前は、「鳩」という意味で、ヨナ書以外で人名として登場するのは先に触れた列王記 14章 25 節のみです。「鳩」という元来の意味では『聖書（旧約）』の各所に登場しています。

ヨナは、預言者としての召命を受けるのですが、その召命から逃げます。ヨナ書は、正々堂々と主の召命に従う預言者の物語ではなく、召命から逃げ、しぶしぶと預言を語る預言者の物語なのです。ヨナは船に乗って逃げますが、乗った船に災い起き、原因がヨナだと判明してしまい、海に放り出されます。そして大きな魚に飲み込まれ、ヨナは「**三日三晩魚の腹の中にいた**」のですが、そこで預言者としての召命から逃れたことを反省します。本日の箇所はその反省の部分です。

魚から吐き出されたヨナは、その後、主なる神様の命令通りにニネベに行き、「**あと四十日で、ニネベの都は滅びる**」（ヨナ 3:4）と預言するのですが、「**ニネベの人々は神を信じ、断食を呼びかけ、大きな者から小さな者に至るまで粗布をまとった**」（ヨナ 3:5）と、主なる神様に立ち返るのです。ニネベとは、北イスラエル王国を滅ぼした宿敵アッシリアの首都です。実際の歴史としてそのようなアッシリアの首都の人々が、弱小国でありまた宿敵であるイスラエルの神様の預言に耳を傾けることはなかったと思うのですが、ヨナ書は、そのように告げます。そのようなニネベの人々の反応を受け、今度は主なる神様は、ニネベに災いを下すことをやめます。

すると今度は、ヨナが不満を持ち、死んだほうがましだと、暑い中、ニネベに

何が起こるか見ようとします。せつかく預言をしたのという思い以上に、預言したことが実現するか否かが、真の預言者か偽の預言者かという判断基準でもあったからです。その預言の元となる主なる神様が意見を変えてはと思ったのでしょうか。そんな思いを持つヨナに対して、主なる神様は、とうごまの木をあたえ、暑さからのがれさせ、ヨナの不満は消えるのですが、その後、主なる神様はその木を取り去ってしまいます。すると再びヨナは不満を持つのですが、主なる神様はそのとうごまの木を題材して、「あなたは自分で労することも育てることもせず、ただ一夜にして生じ、一夜にして滅びたこのとうごまをさえ惜しんでいる。それならば、どうして私が、この大いなる都ニネベを惜しまずにいられるだろうか。そこには、右も左もわきまえない十二万以上の人間と、おびただしい数の家畜がいるのだから。」（ヨナ 4：10-11）と語り、ヨナを諭して、ヨナ書は終わります。

ヨナ書は短いながらも、次の四つの大切な事柄を述べています。第一に、預言という行為が、その召命を受けた人が断るほど、危険な行為であったこと、第二に、主なる神様の行われる正義の業は、イスラエルという枠組みを超えて、異邦人の人々にも及ぶこと、第三に、主なる神様は、いったん決断された裁きを、状況の変化に応じて、特に人々が主なる神様に立ち返った場合、中止される場合があること、第四に、主なる神様は、イスラエルという枠組みを超えて、異邦人であっても自分に立ち返る人々がいることを喜ばれるということです。わたしは、もっとも大切な内容は、四番目の事柄だと思えます。それは、『聖書』全体に及ぶ事柄であり、またイエス様にもつながる事柄だと思うからです。ヨナ書において、「愛」という言葉はありませんが（そもそも旧約でこの訳語は少ない）、ヨナの主なる神様に対する訴えの言葉、「あなたが恵みに満ち、憐れみ深い神であり、怒るに遅く、慈しみに富み、災いを下そうとしても思い直される方であることを私は知っていたのです」（ヨナ 4：2）の中に「慈しみ」という言葉があります。この言葉は「愛」と訳して構いません（この個所のギリシア語・七十人訳は「慈」や「愛」に相当する訳語はありませんが）。

説教で何度も確認していますが、『聖書』全体を通して示されることは、主なる神様のご自身が創造されたものに対する愛です。それはこのヨナ書でも示されています。主なる神様はその愛に応えて、立ち返ることを求め、ヨナ書は、イスラエルは立ち返らなかったが、宿敵ニネベは立ち返ったと皮肉を語っているとも言えます。しかし、その表現の背後にあるのは、主なる神様の愛であることにかわりません。本日の箇所、ヨナは魚の腹の中で、「空しい偶像に頼る者たちは、慈しみの心を捨てている。だが、私は感謝の声を上げ、あなたにいけにえを献げ、誓いを果たそう。救いは主にこそある」（ヨナ 2：9-10）と告白します。本日は、わたしたちの国では平和について深く考える時です。その平和も、主なる神様の愛を抜きにしてはありえません。愛と慈しみを失った悪も、愛・慈しみの心を捨ててただ悪の滅亡の願うことも、平和を生まないからです。主なる神様は、悪の滅亡ではなく、主なる神様は立ち返ることを喜ばれるかです。その平和の実現のために教会がある、そのことを改めて心に刻みたいと思えます。